

# 金型製作で世界へ羽ばたく

テクノマート（宮崎市佐土原町）は創立30周年のことし、県が地域経済の活性化などに貢献している企業を表彰する「宮崎中小企業大賞」に選ばれた。高強度のアルミ材を使った簡易金型で多品種少量の製品を低コスト、短納期で提供するオンリーワンの技術が評価された。創業来、時代の変化を敏感に読み取り、細かに事業内容を見直してその変化に適応。取引先を全国へ広げ、アルミ金型のエキスパート企業に成長した。それでも「海外展開が夢。お金で時間を買えるなら、あと10年は欲しい」。73歳になった今も、経営とものづくりに傾けた情熱は衰えることを知らない。



「金型製作の技術をさらに磨いて県内企業を支え、地域経済を元気にしたい」と語る鮫島社長

鹿児島実業高の機械科を1960（昭和35）年に卒業後、東京の金型メーカーに就職した。自動車関連の企業で、米国製やチェコ製など当時最新型の工作機械がそろっており、ものづくりへの興味が高まった。その後、叔母のいた本県で自動車部品メーカーに就職。そこで金型だけでなく製品開発や生産管理、出荷管理、営業など幅広い分野の業務を経験したことが、テクノマート設立後に大きな強みとなった。

44歳で独立。当時の県内には大手電子部品メーカーの工場などが数多く進出していた。関連部品の製造や機械類のメンテナンスなど、仕事は多くて順調な滑り出しだった。しかし大きく事業展開できるような中核的な仕事を任されない。将来への不安を感じる中、光明となったのが自動車部品メーカー時代に東京の研究所で学んだ3Dデータを用いたものづくり。国内自動車メーカーが他の製造業に先駆けて導入。「これからの時代は3Dデータだ」と感じ、CAD（コンピューター支援設計）による機械部品の試作や成型に経営資源を集中させていった。



これまでの自動車部品関連から医療・福祉分野への事業展開に意欲を見せる鮫島社長

90年代に入り、さらに追い風が吹いた。歴史的な円高や自動車メーカーの海外進出などで、以前勤めていた自動車部品メーカーが在庫削減の方針を打ち出した。OBで生産管理を熟知している鮫島社長に物流の代行業務を打診。在庫管理を担当することになった。現在は国内だけでなく、海外で生産された部品なども自社倉庫で管理。金型製作と合わせ、自社事業の大きな柱となっている。

地元の自動車部品メーカーに勤めていた22歳のとき、戦後を代表する経営者の一人、本田宗一郎氏から薫陶を受けた。「とても気さくな人。『頑張ってくれよ』と肩をたたかれた。若い人をとても大切にしてくる人で『自分たちが会社を背負って行かなくては』と大きな刺激を受けた」と振り返る。会社の事務所には本田氏と一緒に写った写真が大切に飾ってある。

物流の代行業務については「先行きを見極める」と慎重な姿勢だが、金型製作については今後の事業拡大に意欲的だ。「アルミ金型の技術は国内トップクラス。この技術をベースに他の金属金型に負けないものを生みだしたい。それが他の県内企業を支え、地域経済を元気にする力となればうれしい」と話している。（久保野剛）

## ここが聞きたい

－中小企業大賞に選ばれたアルミ材の簡易金型とはどのようなものか。

プラスチック成形用の金型を設計、製作、成型まで一貫して行っているが、金型の材質は鋼材ではなくアルミ材。加工と改良が容易で、製作時間も1カ月かかっていたものが1週間から10日でできるようになった。費用も以前から半減するので、少ないロットでも製作を依頼しやすい。品質や精度も量産型と変わらず、いろんな点で顧客にメリットがあると思う。

－本県のものづくりの課題は。

企業に欠かせない経営資源がヒト、モノ、カネ。その中で一番難しいのがヒトの調達。新しい技術は次々に入ってくるが、それを生かすノウハウを持つ人材はすぐに見つからない。そんな人材がいれば仕事の進め方や事業展開、研究開発のスピードが格段に増す。わが社ではベテランを若手に付け、培った技術が継承されるようにしている。また県工業技術センターの職場内訓練生を受け入れるなど県の人材育成事業に協力している。